

## 〈初代校長先生を偲んで〉 50周年記念誌より

元教頭 吉田 政枝 様

元教諭 加納 一馬 様

初代校長 梶原壽一先生を偲んで

先生は商業科が専門であったが、文学といわず、政治といわず、手当たり次第に本を読んでおられたようで、知識の豊かな先生であった。俳句を好み「いらか」と称して、数々の雑誌にも投稿されていたらしい。漢字の力も相当なもので、よく漢文の先生など、床の間に掛ける軸を読まされては困っていたのをよく覚えている。意地悪でなく、面白半分に若い先生を試されたものである。また大変「書」がお上手で、求められれば誰にでも書いてくれたものである。

また、大変話術がうまくて、職員室で一時間でも二時間でも先生方に面白い話を聞かせていたもので、時に先生方が忙しいときは困ったものだが、そんなことはお構いなく、平気でだれでも捕まえては面白そうに話すのである。話が余りに長くなって、こちらも飽きてきてつまらなそうな顔をすると、ようやく校長室へ引き上げていくのである。

我々も、生徒も、先生の修身の時間が一番面白かった。元来修身という科目は面白くないものだが、先生の授業は面白くて毎週一時間の授業が大変待ち遠しかった。晩年は英語も勉強しだし、よく大きな辞典を抱えておられたのを思い出す。

骨董を集めるのが趣味で、お宅へ伺うと、書齋が古い図書と仏像の骨董品でいっぱいだった。私など古道具屋や古本屋にお供したもので、時には映画にも連れて行っていただいた。今とは違って、老人はあまり映画(当時は活動写真)など見なかったものであるが、先生は時々映画も見ておられたようである。要するに先生は非常に謹厳な面もあったが、学もあり温かみもあり、そして今の言葉で言えば進歩的な校長だったと思う。

梶原先生を偲んで

私は梶原先生に採用されて2～3年の間、低学年の習字をもたされた。履歴書の字を見て、また師範出身だから何かとやれると思われたらしい。校長の命令だから、いやおうなしである。無資格の私は土屋先生の指導を受けながら、自身のない授業をせざるを得なかった。ところがこの五十の坂を越した教え子たちのクラス会に呼ばれて、「お清書を出さないのでひどく叱られた」とか、「先生は怖かった」などと言われて、40年前を思い出すのである。簿記や商事要項の授業よりも、習字の方が強く彼らの印象に残っているらしいので、苦笑いしている次第である。

校長室へ一人ずつ呼び出されて、ボーナスをいただくのだが、領収書付きの期末手当の他に、「お前はよく働いたから、これは特別だ。誰にも黙っている」と言って、右側の引き出しからはだかの10円札を2枚くださった。30円の時もあった。私は非常に感激して涙がこぼれそうであった。そして、校長のご厚意に報いるためにも一所懸命頑張ろうと決意を新たにしたのである。

今でもあの時のいかめしい表情と微笑みがはっきりと思い出される。2・3年もしてからであろうか、ある席でのこの特別賞与のことを話したら、「俺もだ…」「君もか…」と爆笑になったのである。

梶原先生は教員の研修には厳しく、実力のない者には面と向かって「若いうちにしっかり勉強しろ」と忠告した。

私の24年にわたる校長在職中も、教員の研修のためには、金も時間も快く与えたのは、先生による感化だったと思う。